
夕焼けが見える高台で出会った少女は

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕焼けが見える高台で出会った少女は

【Nコード】

N4004Z

【作者名】

刹那

【あらすじ】

俺は制服の色がちょっと変わった学園の二年生。いつも晴れた日にはお気に入りである高台に上り、夕焼けを見ることが日課になっていたりする。そんな9月を過ぎたあたりの頃、いつものように高台を登っていくと、ん?? 前方から転がってくる少女が……? までまでまで!! 一体なんのフラグだよ!!

1 フラゲ的な出会い（前書き）

実際に恋愛小説を書くのは初めてですがどうか読んでいただきたいと思います。

ちょっと電波なところが乱入しますがそこはご了承ください。

1 フラゲ的な出会い

ここから見る夕焼けはとっても綺麗で俺のお気に入りの場所でもある。

いや、違うな。俺達の、お気に入りの場所だ。

雲までもが赤く染まる光景がとても印象的で神秘的で……でも、それだけがここを気に入ってる理由じゃない。

俺とお前が初めて会った場所 だから。

世界を針で突っついたらかち割れるんじゃないかと思うくらい寒い冬が過ぎ、手で握り締めたらほんわかと綿飴みたいに崩れるような温かい春が過ぎ……。

そして、今や世界温暖化で問題になっている猛暑が世界を焦がす夏がやってきた。地球の安否がとっても心配だ！ でも心配するだけで実際に行動したりしようとは毛ほども思っていない。

はじめじめした梅雨を超え、本格的な暑さがここの茅ヶ崎茜宮学園にもやってきたわけだがおかげさまでこの県立学園の一郭はエアコ

ンすらも効かない緊急事態を迎えていた。

クラスのアホどもが教室で野球なんぞという屋外のスポーツを、もう一度言うが屋外でするスポーツを屋内でしやがって紙を何十にも重ねて丸めたボールを教科書を丸めて固めたバットが打ち、見事にエアコンにヒット！ 当たり所が悪く、エアコン様は逝っちまった。

クラスのアホが悪いと担任に言われ、修理の目処が立つまでずっとエアコン我慢生活である。

室内温度は38度！！ 湿度や何やらを含めて体感温度は40を越しているだろう。

額に浮かぶ汗や手の甲にすらも吹き出る汗がそれを物語ってるだろ？ 机の上には必ず必須となるタオルも今日の4時間目を迎えた今は使い物にならないほどにぐっしりと濡れている。

アホか！ 教育委員会のアホ！ 職員のアホ！

こう言いたくなるのは分かるだろう？ 紙で丸めただけの衝撃でご愁傷様しちまう安物のエアコンをよこすなよ教育委員会！！ それで修理しない職員もアホだ！

このクラスで授業をする教師も辛いんだからさつさと直せよ！

まあ、実際は教師の心配なんて全く！ してないけどな（笑）

黒板さんすらも汗かいてるんじゃないか？ はあ……。

そんな無茶苦茶な4時間を過ごして、昼休み、飯を食い終え、またまた授業！

それを乗り越えやつとやってきた地獄から地上に戻る階段であるホームルーム。担任の整った顔にもキラリと光る汗が…… だったら流れてる。

実際はだらだらx5くらいな？

即行でホームルームを終わらしてくれた担任に感謝し、かばんを持って即行学校を後にした。

9月に入ったが実際には夏である。

二学期が始まって夏つてのは神様のいたずらなんてレベルを超えて神様の八つ当たりだ！ もう涼しくなっけてきても良いだろう？

ああ、秋だなんて教えて欲しい！

鈴虫よ鳴け！ セミよ静まれ！！

はやく秋来いよ。

なんて思いながら額に流れる汗を同じく汗で濡れた右手の甲で拭く。

向かっている先は俺のお気に入りの場所である。

田舎ではあるが街中からかなり高台に位置するこの学園は入り口から右と左に道が分かれている。右は茅ヶ崎方面で左が茜宮方面。

俺が向かう先は左の茜宮方面だ。だが、すぐに地面に敷き詰められたコンクリートの道からはずれ急な坂道が続く芝生の上を歩いていく。

そう、この先には絶景とでもいえるすばらしい町並みが見れる場所であり、絶好の夕焼けが見える高台に出る。

俺はそこに向かって教科書の入った重たいバックを持って歩いているのだ。

空は赤く染まり、ちょうどよく夕焼けが見える頃だろう。まあ、大抵夕焼けが見えた場合、明日か明後日に雨が降るから傘が近いうちに必要になるっと思っておけるわけで一石二鳥とも言える！

早く見たいな！ そう心が騒いでる。

視界を高台の頂上に向けていると転がってくる白い髪の毛をした

女の子が転がってきた。

女の子が転がってくるなんて珍しい……………って。

えええ！?? 女の子が転がってくる！?!?

頭が混乱する。当たり前だ！ 普通ありえんだろう!!

反射的にかばんを放り出し、まっすぐ俺に向かって転がってくる少女を受け止める。

勢いの乗った重みが体の心を駆け抜け、体が後ろに倒れそうになる。ここで倒れると俺もろとも転げ落ちてしまう！ そう思い、必死に踏ん張り耐える。

「おい!! どうしたんだよ!!」

声をかける。

少女はごほごほと咳き込んだ後に強く瞑っていた目を見開いた。瞬間的に分かる……………すげえ……………かわいい。

整った顔をしている。ぱつちりと開いた目が俺の瞳をしっかりと捕らえている。

俺が見とれている間に少女は俺に一言もかけずに俺の腕から離れ、猛ダッシュで駆け上がっていく。

何事なんだよ？

絶対にただごとじゃないよな!? 俺は放り投げたかばんを拾い上げてから高台の頂上に向かった。

到着した時には高台の中心で取っ組み合いしている茶髪ポニーテールの茜宮学園の三年の女子学生とさっきの少女の姿があった。その二人のようすを見守るように黒髪の静かそうな同じく茜宮学園の三年生の女子生徒の姿も若干離れたところにある。

茜宮学園は色々と特殊な学校であって制服の色が学年によって変わる。

三年生が赤紫

二年生が赤

一年生が黒

と言った具合だ。

白い髪をツインテールにしている少女と対峙しているのが三年だと分かったのもそこにある。

俺は赤色なので二年生だ。

そんなことは置いといてだ!!

俺はどうするべきか思案した。喧嘩を止めるべきか、はたまた無視すべきか。

関係の無い喧嘩に首を突っ込むのは嫌だからなあ……。

とか考えているうちに事態は動いていた。

三年生が放った膝蹴りがまともにツインテールの少女の腹を捕らえたのだ。そのまま腹を抱えたまま少女は倒れこむ。

その様子を見て三年は何か言いながら連れなんだろう黒髪の静かそうな少女の元に向かった。

そのまま俺に見向きもせず高台を下っていく。俺はその二人から視線を外し、目の前で倒れている少女に駆け寄りしゃがみ込んだ。

「惜しかったな。リベンジあるのみだ」

とか言ってみる。

少女はゆっくりと立ち上がりしゃがみ込んでいる俺を見下ろした。やはり整った顔立ちをしている。強気な性格なんだろう、吊りあがった目にすらっと伸びる眉毛、小さな唇に小柄な顔。

髪は世にも珍しい真っ白な……純白のツインテール。腰まで伸び

た髪房は先まで整って伸びている。体はかなり小柄だ。中学生？？
いや、小学生に見えないことも無いがきつと違っだろう。

俺は立ち上がって逆に少女を見下ろした。

少女はしばらく俺と目を合わせていたがすつと目を離し、歩いてく。ちよつと体がふらついていているのは危なっかしいが……。

その後姿を見送っていると少女は急に振り返ってきた。

「励ましてくれて……いや……なんでもないわ」

澄んだ声と言葉を残して高台を下っていった。

なんか……えらいフラグを張ってしまった気がするが……気のせい
いか？ 考えすぎか？

こつも絡み合った感情で夕焼けを見る気にはなれずにはぼ沈みか
けの夕焼けに背を向け、自分の家に向かって高台を下った。

次の日。

まあ、案の定曇天で雨が降るかなあつと思つたのだが天気予報で
は昼からは晴れると聞いたのでちよつと嬉しかったような悲しいよ
うな。

晴れるということは太陽が顔を出すということだ！ つまり夕焼
けが見えるがその日差しは確実に地面を焦がす。つまりのつまりは
熱くなる……またあの地獄が待っているということを表しているの
だ。

朝から憂鬱な足を引きずって学園に登校する。

学校に着き二年の校舎の廊下を歩いていると耳に入ってくる言葉……。

『美少女の転校生がくるらしい』

眩暈がしそうだ。

まさか本当にフラグが立ったんじゃないだろうな……。

教室に入ると正宗まさむねがこちらに向かって大声を上げながら走ってきた。

「一真かずま!! 一真! たいへんだあ!」

「なんだよ! 次はなんだ? 窓でも割ったか? アホ」

「ちげえよ!」

正宗はこの学校で仲良くなった俺の友達だ。

彼女居ない歴〓年齢という俺と同じ経歴の持ち主だが、こいつはちと特殊でな……。

まあ、簡単に言えば‘たらし’だ。

これまた大層な女好きでクラスどころか学年全体が恐れ慄く正宗様である。

「じゃあ、なんだ?」

ちなみにエアコンを壊したアホの一部にこいつも入っている。

「転校生が来るんだよお!! しかも美少女!!!」

「……なんだ……そんなことが……」

一瞬でも焦って損した……。

のそのそとまだ重たい足を引きずって自分の席に行く。
そして気づいたこと。

「なんで、俺の横に机があるんだよ……」

俺の隣にはいつもはない机がある。

まあ、なんとなく見当はつくが……。

「俺も来て思ったよ。もしかしたら……な!」

「俺は期待なんてしないからな」

「なんでだよ!」

正宗の気持ち俺には分からないよ……。

隣に置かれたオニユ一の机を見ながら自分の机にかばんをかける。
それと共に教室に響く声。

「かずー!」

「朝から元気だな」

走って教室にやってきたのは柊 菜摘

新聞部副部長で二年生ながらも新聞部のエースとして学校に耳寄りな情報を提供してくれる。

さて……今回は……まあ……なんとなく察しがつくが……。

「耳寄りな情報をご提供!! 聞きたい?」

「いや……べつ」「……ききたいいいいいいい!!……!」「……」

俺の声を遮るようにクラス中の生徒が一気に叫んだ。

お前らただ野菜摘の情報を待ってるんだよ。洗脳でもされてるんじゃないか?

「ありがとう！！ んじゃ、とびきりの情報を！ 転校生はこのクラスに来ます！！！！」

うわあああ！！

一気に歓声上がる。

俺は違う意味でうわああだよ……。

まだ決まったわけじゃないだろうが十中八九あの少女だろう……。

キンコン……

チャイムが鳴り始め、手を振りながら自分のクラスに戻っていく菜摘。

それと引き換えに教室に入ってくるのがTHEイケ面の花園先生である。さらさらの長髪にすらっとした鼻立ち。俺は今までこの人よりイケ面の顔を見た事が無い！

毎度ながら、花園先生の額には汗がキラリと光っている。

「おら！ 席に着け！ みんなに吉報があるぞお！」

そう言いながら黒板に白い文字ででかでかとか誰かの名前を書いた。
『^{さかき}神 ^{ゆうひ}夕緋』

ゆうひ……？

変わったお名前だな……こんな田舎じゃ聞いたこと無い名前だ。

ああ……なんか色々嫌な予感が頭に浮かぶよ……。

まず夕緋って名前が夕日と被って腹立つんだよね……。

顔を俯け、できる限り関係ないような雰囲気を出しておこう……。

「転校生がきたぞお！ それじゃ、入ってきてくれ」

見たくは無いが……これは人間的な本能的行動だろう……ついつい目がそっちに行ってしまう。

入ってきたのは小柄でパツチリ開いた目と絶対に一度見た者の脳裏に焼きつかせるだろう純白のツインテール。

教卓の前に立たされた転校生はすっごく美少女だった。

絶世の美少女だった……。

モデルにでもなれるだろう……ちょっと体の小ささが目立つが……。

美少女だ。

昨日、ばったり出会った美少女だ。

喧嘩していた美少女だ。

脳裏に焼き付けられているツインテールがそれを証明しているだろう……。ああ……。ほんとにフラグ立ちまったよ……。

こうして俺達はまた出会ってしまった。

頭に渦巻く不安と恐怖と悩みと期待？

もう……。しらねえよ……。

神様……。俺はここではつきりと思ったよ……。

‘運命’って言うのが本当に存在してるってな。

T
O

B
E

C
O
N
T
I
N
U
E
D

1 フラゲ的な出会い（後書き）

ちよつと表現が変だったりするでしょうか？
感想などよろしければ書いてください！

榊の妹 紅恋の妹

美少女転校生の榊 夕緋が来た事によって俺の学校生活は大きく変化する事になる。

まず第一、休み時間になると、俺の隣の席に居る榊のせいで休み時間中席に座っておく事が出来ない事。

第二に授業中にまだ榊には教科書が届いていないため教科書を見せてやらなくてはいけない事。これが一番の問題だったりする。

俺等の学園は隣の席同士がくっついていて。一般的な小学校の教室を思い出してもらえれば分かりやすい。だから簡単に教科書を見せてやれるんだが……こう……こいつはどうも猫を被っているようでとっても清楚なお嬢様を気取っている。

そのため、教科書を見せるといっただけで会話をする点が出来てしまい、そのたびに吐き気をもよおす。ああ……ほんとについていないと思う。

なんだかんだで放課後です……。

滴り落ちる汗がもう冷や汗なのか熱さのせいなのかよく分からんが、もうとりあえず帰りたい。

朝の曇天がいつの間にか真っ青な空に一変していた事に気づいたのは放課後になってからだった。

と、言ってもだ。

まだ夕焼けを見るにはいささか早すぎる。今見に行ってもちよつと赤くなつてゐる程度で綺麗に見えるとはいえない。

その間、少し学園内をブラブラすることにした。

二年校舎があるのは北校舎だ。そして俺達二年の教室は三階から四階まで。俺のクラスは三階だ。学園内全部で五階建てで北、西、東で分かれている。北校舎の西階段から下におりると一階にはちよつと食堂がある。そこで一服しようかと思い、足先を向けたわけだが……。

カツツ……つと革靴が鳴る音が背後で聞こえた。

今居るのは三階と二階の間の西階段。ここを通るのは二年生と職員くらいなのだが、まあ、どちらにせよ誰かがいるのは間違いない。そう思つて振り返つた……が。

「だれもいねえ……」

自分でもびつくりしてる。

確かに足音は聞こえたのだ。なんだなんだ！ こんな夕暮れにお化け様の登場だったのか？ 流石にそれは無いだろう。

きつと俺の歩いた音が若干遅れて俺の耳に入つたんだ！ そう、思おう！

と、そう開き直りまた下に向かおうと振り向くと……。

「うわあー!!」

「え？」

あまりにも唐突過ぎた。

目の前に女子生徒が立っていたのだ。

制服が黒色のところから察するに一年生のようなが、上腕辺りにまかれた文字入りの布が目に入った。

『風紀委員』

それが表すのは言葉どおり、風紀委員に所属している事を示しているのだが……。

「大丈夫ですか……？」

「あ、ああ……悪い……」

「すみません……静かにしすぎてたみたいで」

「ああ！ 気にするな」

その一年生の女子生徒はぺこりと頭を下げた。

そこでふと、疑問に思ったというか興味を持った。なににかつて

？ いやいや、この女子生徒の髪の色だよ。

綺麗な純白な髪の毛じゃないか……。腰までストレートに伸びている。顔を上げた女子生徒の顔はとても整っていてどこかだれかに似ている気がする。

誰だろうか……。んん……。芸能人の誰かだろうか？

「あの……私の顔がどうかしました？」

「あ、いや！ なんでもない。すまなかったな」

そういつて俺は歩き出して女子生徒とすれ違った。

しかし……。ほんとに誰だろうな……。髪の毛でぱつと浮かぶのは榊だが……。いやいや、榊に似ているか……。？ 似てなくも無い……。けど……。

そんなことを思いながら二階から一階に下りる階段に差し掛かったとき。。

噂をすれば何とやら……。目の前に真っ白なツインテールを揺らしながら上に上がってくる榊がいた。

こちらにふと、顔を上げるとちよつと不機嫌そうに俺を睨み、ふいつとそっぽ向いた。いやいや、なんだよ……。

そのまますれ違う。

だが、ここでハプニングだ！！

長い長い榊のツインテールのかたつぽの先がつれ違う俺の鼻を掠め……。

「はっ……はっ、はつくしゅー！！」

盛大にくしゃみをかまして、前に体重をかけてしまう。つまりは……。

あ、やっちゃった……。そう思ったときにはもう遅い。俺の目前にはコンクリートで作られた床が迫り……。

ガッツ!!

「いて!!」

覚悟しても……痛いものは痛いな……。

「なにしてんのよ」

背後からそんな声が聞こえ、鼻を押さえながら振り返ると榊が手を差し伸べてきた。

「あ……?」

「さつさと起きなさいよ」

「あ……おう」

小さな手を掴み、起き上がるために手伝ってもらう。

ってか、どうでも良いが猫かぶりはどうしたんだ? その言い方授業中とは全く違うじゃねえか。

「ふん」

用は済んだわ　と榊の背中が言っているように聞こえるのはなぜだろうか……?

アニメの見すぎ……?

まあ、いいや。

これまたどうでも良いが……、女の子の手ってあんなに小さくて柔らかいモンなんだな……。

感触を確かめるように掴んでもらった手を握ったり、放したりを幾度か繰り返していると……。

「また会いましたね?」

「うおう!!?」

決して大げさに驚いたわけではない。しかし、傍から観れば明らかにオーバリアクションに見えただろう。

「あははは。すいません。驚かそうとしたわけではないんですよ?」
振り返った所に居たのは小さく笑っている純白のロングヘアーの女子生徒。上腕に巻かれた『風紀委員』の布……なんでこの短期間

で、しかもさつきすれ違ったばかりの子にまた会った。

「あなたはお姉ちゃんとの知り合いですか？」

「……お姉、ちゃん？」

「はい。さつき、あなたを起こした女子生徒の人です」

「榊の……事か？」

「あ、やっぱり知り合いでしたか。私は榊観紗緋さかきみさひです。榊夕緋の妹です」

ぺこりと頭を下げられる。

「あ、俺は西条一真さいじょうかずま……榊と同じ学年で同じクラスだ」

「そうですね。あ、榊ってお姉ちゃんのことを呼ぶなら私と区別しにくいと思うので私のことは観紗緋と呼んでください」

「あ、分かった。俺のことは好きに呼んでくれて構わない」

「それでは一真先輩と呼ばせてもらいます！」

「おう」

「それでは、失礼しますね」

そう言って観紗緋はぱたぱたと革靴の音を立てながら階段を上っていった。

しかしまあ、あの白い髪すげえ綺麗だな。それに夕緋の妹だろう？全然違う性格してるじゃねえか……。

夕緋も髪の毛おろせばあんな性格になるんじゃないか？

はあ、もうそんな冗談はいいか。

そのまま階段を下りて、食堂に入った。

入口のそばに置いてある食券の自販機に金をいれて、オレンジジュースの食券を買う。ちょうど、飲み終える頃には夕陽がいい感じに見えるだろう。

そう思って俺はオレンジジュースの食券を手受付のおばちゃんの下に歩いた。

別に俺は親の言いなりになっているわけじゃない。ただ、俺の意志がそこにあるからだ。

なんて言い訳にしか聞こえないよな。やはり俺はそんなにかっこいい人間では無いようだよ。優子……やっぱり俺はお前の思うような人間じゃないんだ。

わかってくれ。

そう小さくつぶやき、俺の膝の上で寝る妹の優子の頭を撫でた。長い黒髪が撫でるたびにさらさらと動く。度々うめき声を上げながら寝返りをうつたびにソファから落ちるんじゃないかとヒヤヒヤするが、今のところ落ちる気配はない。

小さな寝息を立てながら眠っている優子はこの同条院家の長女……という形でこの家に住むいわゆる養子だ。親が女の子が欲しいと思っていたが残念ながら生まれたのが俺で、そして俺を産んでから母上はすぐに他界。悲しんだ父上が出向いた先は孤児院。そこで見つけたのが優子だった。

たしかに優子は母上の面影を感じる。長い髪の毛が母上にそっくりだし、目尻がつり上がっているところがやけに母上を思い出させてくれる。まあ、俺が見た母上は写真上の話なんだけどな。

優子が来て10年。時代は大きく動いて、今や経済が大発展。多く稼いだ者が勝ち組にあがり、少ないものは負け組になる実力の資本主義。

俺ら一家も必死にその時代にしがみついている。そんな中、この同条院にひとつの声がかかった。

『大企業の娘との結婚』

結婚するのは父上ではない。俺だ。

日本の中枢に位置するといってもいい大企業からの提案がこの同条院に持ちかけられたんだ。

俺だって、許嫁ってというのは気分がいいものではない。だが、負

け組になるのはどうしても嫌だった。

母上に……恥をかかせない……。それが俺の一番の気持ちだった。優子はこのことに大反対している。俺にひたすら考え直すように言ってくる。まだ中2の優子にはいささか早い話だがなにか譲れないものを優子も持っているんだろう。

「ん、んう……」

小さくうめき声を上げながら、優子はゆっくりと目を開けた。俺の方を見上げ目を数回こすったあと、また目を瞑ってしまった。よほど眠たいんだろう。

「紅恋^{くれん}おぼっちゃま。失礼いたします」

ドアの向こうから控えめな男の声が聞こえる。俺はちょうど前方の壁に掛けてある時計を見る。時計の針が指す時間を目にして気づく。

そうか……もうこんな時間か。

「入れ」

「それでは……」

ゆっくりと扉が開き、白髪を伸ばした中年の男が頭を下げてから入ってくる。この人は俺が生まれた時からこの同条院家に使える用人だ。垂れ下がった目や伸びたヒゲがとても俺を安心させてくれる。名前は藏川^{くらがわ}総司^{そうじ}だ。

総司はこちらに目を向けると微笑みを含んだ声で言ってきた。

「これはこれは……仲がよろしいようで」

「今日は偶然だ……優子が膝で寝てしまったからな」

「そのまま寝かしてあげる紅恋さんもまんざらではなさそうで？」

「ああ。こういう時間は貴重だからな」

「それほど、お嬢様の事が好きでしたか？」

「違うよ……これほど静かな時間が貴重ってことだ」

「素直ではありませんねえ」

「なにか言ったか？」

「いえいえ」

最後の一言はなんて言ったか分からなかった。まあ、どうせ俺らのことをまた言ったのだろう。

とりあえずだ。この俺の膝で寝息を立てている優子をどうにかしないとな。しかし……もういいか……抱きかかえてベッドまで持っていくこう。

俺は優子の頭を膝から持ち上げ、ソファに寝かす。その体とソファの間に手を差し込んで抱え上げる。優子の部屋まで連れて行くのが面倒だったから俺のベッドに寝かしてやる。

「やはり、起こさないですね」

笑いを隠しきれずにっこり総司は笑う。

「気持ちよく寝ている奴を起こすのは気分が悪いからだ」

「ほっほっほ」

また総司が小さく笑う。まったく、こいつは……。でも、俺はこんな総司が嫌いではなかった。

「さっさと準備しろ」

「承知しました」

そう言っ自分の腕に丁寧に折りたたんだスーツをソファの前のテーブルに置いた。

「これで出席とのことです」

「白色……？」

「はい。ご主人様からの要望で」

「……そうか」

俺は白色のスーツに手をかける。俺は白色というのが嫌いだ。何色にでも染まる……なにも自分を持たない空白の白が……。

いつもは黒なのにどうしてこんな……。くそ……。

「んんっ……」

ベッドの上の優子が唸る。そのまま寝返りを打ってこっちに顔を向けてくる。

目は安らかに閉じられ、小さな口からは寝息が漏れている。あい

つ……いつもあんな顔なら良いのになぁ……っと急がないとな。

さっさと着替え、総司が手に持っていたカバンを受け取る。

「それじゃあ、行くか」

「かしこまりました」

俺は玄関に向かって歩き出す。俺が出る前に総司が部屋を出て扉の前で俺が出るのを待機してる。

俺は部屋を出る寸前に振り返り……

「行ってくる」

そう静かに言った。

誰に対して言ったかは聞かないで欲しい……。

T o B e C o n t i n u e d

柊の妹 紅恋の妹（後書き）

ちょっと飛びすぎてますかね……。
すいません。

なんだかんだで……

あいつの笑顔が……

食堂でオレンジジュースを飲む俺をきつと食堂のおばちゃんは異様な風景として見ているんだろうな……。

そう思いながら360ミリリットルのコップの3分の1まで減ったオレンジジュースの片手に周りを見渡した。学年全員がここに来ても入るような大きな食堂にぼつんと一人だけ座っている俺。明らかな‘寂しい人’だ。

ああ……泣けてくるね。決して友達がいなくてかそんなんじゃないんだからな。そこだけは勘違いしないでほしい！

って何一人で弁解してるんだろうな。

そう一人で自分につっこみ、窓から外を見る。外にはこの高台の近くにある松林が見える。そういえば、あそこで昔よく遊んだなあ……。ふと、視線を上上げる。そこには真っ赤に染まった空が……。

夕焼けだ！？

「やべー！」

残りのオレンジジュースを口の中に流し込み、食堂の『お残しはゆるしまへんで』とかかれた札が掛けられている厨房と食堂をつなぐ戸棚にコップを置く。

そのままダッシュで目の前の北校舎西階段を駆け上がる。夕焼けとは一瞬の奇跡であり、それを逃せばもう見る事ができない一度きりの奇跡なんだ！ 遅れるわけにはいかん！！

三階に上がる最後の一段に足を引っ掛け、こけそうになりながら

も教室に走り込もうと扉に手をかけると……。

ガラガラ

俺が開けるよりも早く扉が開いた。さて、この状態で誰かに出てこられたら……。案の定、開けられた扉の向こうには純白の髪の毛を伸ばした女子生徒が……。

観紗緋　！？

急激なブレーキをかけるオレだが、これほど近距離な観紗緋をよけることができるはずなく俺の体は宙に投げ出される……。って、え……？

ドガ、ガダダダ！！

宙を舞った俺は教室の前から二番目、入口方面から二列目の席に体ごと突っ込んだ。派手な音を鳴らしながら俺に襲いかかってくるように倒れる机に俺は押しつぶされる。

「いつて！　あああ……」

うめき声しか出せないのが現状だ。いやしかし、なんでこうなったんだよ……。

観紗緋にぶつかりそうになって、ブレーキかけたけど間に合わなくて、ああ……。当たる！　って覚悟した時にはこの様だ。いみわからん。

「大丈夫ですか！？」

「ああ……。やつちゃったわね」

「観紗緋い……？」

うつぶせに倒れる俺の上からのしかかる机を観紗緋が持ち上げどかしてくれた。いかん……。腰が……。

うう……。腰を抑えながらゆっくり立ち上がる。

「なにが……。どうなったんだ……？」

「すいません！　私のせいです！」

「さてさて……。事情を話してくれ」

倒れた椅子を立てた俺はその椅子に腰を下ろす。

「私……。護身術で色々、武道を学んでまして……。それでつついっ飛

び込んでくる一真先輩を反射で投げ飛ばしてしまつて……」

すごいなあ……観紗緋の1・5倍ぐらいの体重の俺をいとも簡単
に入口からこの距離まで飛ばすなんて……一体、その細身の体のど
こにそんな力が……。

「あんだ、こいつの知り合いなの？」

俺が観紗緋を見ている視界の端から純白のツインテールを揺らし
ながら歩いてくる榊が観紗緋に問いかけた。

「ってか、お前いたんだな。」

「え？ うん。さつき階段の前であつたんだ」

「へえ、そう。こんな奴と関わっちゃダメよ観紗緋」

「人を悪い虫みたいに言うな」

「いちいち感に触る言い方しやがるなこいつは……！！」

「あんだ害虫そのものじゃない」

「シラつとそんなこと言うなよ！！」

「なんなんだよこいつは！？ 俺の何を知つて害虫呼ばわりしやが
るんだ。」

「可愛い子だからって気安く話しかけるなんて害虫じゃない！ あ
の高台でも私に話しかけてきたし！！」

「お前……暗に可愛いって自慢してるのかよ？」

「軽い挑発を飛ばしてやる。」

「……！！ うるさい！！ 死ね！」

「え！？ ちょ……！！ 待てって！ うご……！！？」

最後の一声は俺が榊のキックを顔に受けたから漏れたんだと思つ
てくれ。お前も護身術習つてんのか？

「……うるかむっちゃいてえ……。」

「それと……水玉……。」

「死ねばいいのよ！」

「そう言い残して榊は教室を出て行つた。」

「口で勝てないからって暴力を振るうとは……くそ……なんか負け
惜しみみたいになつてる！！」

「ほんとにすいません」

観紗緋はぺこりと頭を下げ、こちらに手を差し伸べてきた。観紗緋……お前は姉貴なんかと違って出来た女の子だよ。姉妹とは思えないほど違う性格よなあ。

あ、でも榊も階段では手を差し伸べてくれたっけ？

「すまん」

手を握り、起き上がる。

椅子をもとに戻して大きく伸びをする。観紗緋はそんな俺を見てクスクス笑った。

「なんだよ？」

「別になんでもありませんよ。それでは失礼しますね」

もう一度、ぺこりと頭を下げってから観紗緋は教室を出て行った。

ああ……もう……なんかドツと疲れたよ。そう思いながら窓の外を仰ぐと……真っ赤に染まったそ　そう！！　夕焼けだ！！

腰に走る鈍痛を我慢しながらカバンを自分の机から取り、ダツシユで教室を出る。西階段を高速で駆けおり一階の廊下を走り抜ける。校門の前で榊たちに会ったが「じゃあな」の一言を残して俺は走り去った。

いかん……腰は痛いし、カバンに入っている教科書たちが俺の足にダメージを与えてくる。この5キロ弱の荷物を持ってこの急な坂道を登るのはちと至難しなんの業わざだ。

しかし、俺はこの先にある奇跡の夕焼けを見るために戦うしかないのだ。とかなんとか言っただけでエエと息を切らしちまつてる。いやしかしこの斜面急すぎるだろ！？　はあ……。

まあ、なんとか登り切り、高台の芝生の上に座り込む。

「ふう」

ついつい出てしまう溜息。いや、ほんとに疲れたんだって……でも、この夕焼けを見るとなにもかも飛んでいくな……。

このまま眠っちまいそうだ……そういやあ……今はなんか熱くな

いな……心地よい暖かさだぜ。

「あんた……」

背後から聞こえた声に振り向くとそこには榊が立っていた。

夕焼けの光に反射した純白のツインテールはこれはこれで違う輝きを放っている。

「榊か……」

「夕緋って呼んでいいわ」

そう言いながら俺の隣に腰を下ろす。

夕焼けを眺める夕緋の姿は凜々しくも見えたりして……見惚れてしまうほどだった。

こう見るとほんつとに美人よな……びっくりするぐらい。それに夕焼けという接点がこの美少女転校生とあったとは驚きだ。

しかしまあ、この俺と夕緋のツーショットを誰かに見られたら色々と問題になりそうよなあ。

「榊……夕緋はこの場所知ってたんだな」

「昨日知ったんだけどね」

そういえば、昨日こいつはここで三年と喧嘩してたんだっけ……。なんで喧嘩してたんだろうな……。その疑問を口にしようとした瞬間、夕緋が口を開いた。

「きれいな……」

「あ……？ おう」

「そう言えば、まだあんたの名前聞いてなかったわ」

「西条一真だ」

「西条？」

「ああ」

「変わった苗字ね」

「お前もそこそこな」

なんだかんだで話が噛み合ってる気がする。こういつこいつならまだ可愛いと思えるんだが……。さっきの時とか授業中とかどうだよ……。あ、そうだ……。

「なんでお前、猫かぶってるんだよ」

「はい？」

「授業中……むちゃくちゃかぶってんじゃないか」

「あれは……私の素^すよ」

「じゃあ、今はなんだよ」

「……素^すよ」

「どないやねん」

そんな話を夕焼けが沈むまで俺たちはやり続けた……。

揺れる車内の中、俺はそつと外を見た。そびえ立つビル群。走りゆく車。歩道をおるく数多の人。こんな都会では珍しくない光景だ。この日本の都市、東京都は今は経済の中心地。ここを無くしては日本は成り立たない！ そう言っても過言ではない。だが、もう少しで俺はこの都市をしばらく離れないといけない。それはどうしても笑えない話のせいだ……だ。

最近ずつと父上と話す内容はこのことだ。もう、うんざりだ。

優子は優子でうるさいし、俺だってわかってるんだ。そんなにしつこく言われたくない。

白色のスーツが目に入り、また気分が悪くなる。

自ずと出てくるため息を俺はこらえることなく出す。きっと帰ればまた優子に行くとかどうとか言ってくるのだろう。憂鬱だな……。

「ぼっちゃま。いつもよりため息が一層多いですな……どうかなされましたか？」

総司が運転席からこちらに振り向いて話しかけてくる。前方をみるとどうやら赤信号らしく、その時間つぶし……と言ったところか。「なんでもない」

「ほほほ。そうおっしゃるときは大抵、なにかある時ですぞ？」やはり総司に勝てないな……。まったくこいつは……。

「……帰ったらまた優子に言われるんじゃないかと思ってな」

「喧嘩するほど仲がいいと言うではありませんか」

「喧嘩じゃない……」

「ほう？ では今日のような仲の良いスキンシップですか？」

「そんなわけないだろ！ それに今日は別にあいつと遊んでいた訳じゃない」

「ほほほほ」

そう言つてアクセルを踏む総司。そこから総司がしゃべることはなかった。

俺だつて前の頃のように優子と仲良くしたいさ……。あいつの笑顔をみたいさ……。

……そういえば……明後日は優子の誕生日だったな……。父上はご帰宅なさるのだろうか……。きっと帰ってこなかったら優子のやつ……悲しむだろうな……。

「ふん……」

つつい鼻で笑ってしまった。

俺はどれだけ妹のことが好きなんだろうな……。別にそんなつもりはないのに……。

「総司……」

「はい？ なんでしよう？」

「帰り道で、どこか良い店はないか？」

「……どのような……？」

「中学生の女子が喜ぶような物が売ってある店だ」

「……ほう。分かりました。ちょうどすぐそばにありますので、向きましょう」

「頼む」

でも、やっぱり俺は……。

あいつの笑顔が見たいんだろう……。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

なんだかんだで……

あいつの笑顔が……（後書き）

ちょっと無理やり感がありますね。

どうもこの具合が調節できなくて……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4004z/>

夕焼けが見える高台で出会った少女は

2011年12月26日21時02分発行